

月の句を置く。(91頁写真参照)

句帖に3句、他6句。又「三人の冬」として水巴、左衛門、長頸子による12句。「夜長の団居」として寒燈吟の6年9月15日〜11月24日まで10回分より27句、うち長頸子9句。

吟社師走例会記事に3句。文章に「流觴居夜話」(水巴述、長頸子記)があり、又「新年三題」とした随筆に、小品「屠蘇」。

2月2日・寒燈句会、長頸子方。

3日・節分。吟社例会上野花山亭は来会者33名、虚子も出席、席題「避寒」。苔雨記す例会記事(「曲水」2-10)に「長く掻き上げた髪の毛を大事そうに変な黒い帽子を被った長頸子」とある。

「曲水」(2-9)。句帖の4句は正月帰省中のもので静岡長頸子とある。静岡句会での3句(水巴選)があり、又句帖には余石(2)鳥喙子、潮人、斗風(各1)ら静岡俳人の名が見える。(静岡句会が縁となり加藤余石を吟社へ紹介したのが大正7年であった——余石談)

他に、流觴居小集として、地方から上京の社員歓迎句会が2回あり、各1句づつ。他に4句。

3月2日・夜、流觴居雑祭に出席。「曲水」(2-11)に当夜の模様を長頸子記す

吟社3月例会、席題「梅」2句。

「曲水」(2-10)、句帖に「帰省」5句、水巴選の寒燈句録として6年12月1日〜7年2月2日の句会より5句、吟社2月例会1句。

下旬・「曲水俳句鈔」編さん一段落。

31日付青木幸太郎宛ハガキ、水巴父渡邊省亭の重態を知らせ

ており、又4月から帰省の予定だったことが知られる。

4月初旬・花鳥画家として知られた省亭画伯死去。流觴居出入りの俳人達は、水巴を先生、省亭を大先生とよんでいた。

「曲水」(2-11)、句帖に5句、他3句、吟社3月例会席題2句、小品「流觴居雑祭」載る。

5月5日・省亭画伯追悼句会が吟社5月例会をかねて深川潮江院でひらかれる。当日の模様を「曲水」(3-1)に長頸子記す。

6月・吟社6月例会、席題「梅雨、時鳥」。

23日・水巴居宅を、麹町区三番町26番地へ移すことになり、以後吟社の例会や事務もここで一括されることとなった。

又、吟社経営3年目に入り、従来の幹事大谷碧雲居他6氏に、新たに樹人、苔雨、長頸子、徂春、よしをの5人が加わることになり、これより曲水誌編集を徂春、長頸子、会計文書事務を苔雨、よしをが責任担当すること他が決まり、「社告」で(3-1)以降の「曲水」誌上に掲載した。

「曲水」(3-1)。省亭

画伯追悼句会(5月例会をかねる)記事及び2句。句帖に4句、鬼城選「春の月」

に3句、他1句。吟社6月例会席題句3句、他に2句。

7月7日・吟社7月例会、於麹町三番町新流觴居、席題「水馬、紫陽花」2句。

24日、「曲水」編集雑誌。

